

機関番号：25403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 年度～2010 年度

課題番号：21720009

研究課題名（和文）：記憶する言葉の哲学

研究課題名（英文）：A Philosophical Investigation of the Language for Remembering the Past

研究代表者：

柿木伸之（KAKIGI NOBUYUKI）

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：60347614

研究成果の概要（和文）：言語活動そのものを他の言語への応答ないしその翻訳と捉えるヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学と、非随意的な想起にもとづいて、現在支配的な歴史が抑圧してきた記憶を救い出す、もう一つの歴史の可能性を論じる彼の歴史哲学とを接続させる理論的な考察をつうじて、期せずして出会った一つひとつの出来事を名づけ、またそれを生きた他者の名を呼ぶことにもとづいて語り出される言葉が、従来の歴史では「表象不可能」とされる出来事をも想起する媒体としての像として捉えられうることを明らかにするとともに、この像が生成する現場を、文学作品をはじめとする芸術的表現のうちに見届けうることを指摘する。

研究成果の概要（英文）：In this research I have found a relationship between Walter Benjamin's philosophy of language, which grasps act of speech itself as response to other or translation of language of the other, and his philosophy of history that argues on another history as rescue of memories, which are oppressed by dominant history, through non-intentional reminiscences. Thorough this theoretical investigation I have pointed out, that encounter with past events is a chance of another history which will be based on remembrance as naming, naming each event or calling other, who underwent it. According to my research this history will be expressed by images as medium of reminiscence, in which events — although they transcend "limit of representation" — will also be remembered, and literary or artistic works generate such images.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学（13）

科研費の分科・細目：哲学・倫理学（2801）

キーワード：哲学、美学、思想史、記憶論、文学論

1. 研究開始当初の背景

広島や長崎における原子爆弾の被爆者たちの証言、あるいは沖縄戦を生き延びた人々の証言は、しばしば凄惨な出来事を生きた記憶そのものが語り始めるかのように語り出

され、出来事が今なお完結していないことを、それどころか証言する者のなかでは戦争が終わっていないことさえ、現在に突きつける。自分がその死を見届けた死者たち、そして場合によっては見捨てて行かざるをえなかつ

た死者たちと、記憶において向き合うなかから、さらに言えば、その死を経験した自分自身の癒えることのない傷口から語られる証言は、しばしば途切れ、けっしてひと続きの物語に収束することはない。だが、そのように亀裂を含んだ証言は同時に、そうであるがゆえにこそ、証言される出来事を経験しなかった私たちへの問いかけでもあるのではないか。そして、それに応じるとき、私たちは記憶すること自体を、さらには記憶を語り継ぐことそれ自体を、その可能性へ向けて問わなければならないはずである。では、私たちはそのように、記憶することの可能性への問いを自己自身の問題として引き受けるかたちで、かつて起きた出来事の証言に耳を傾けてきただろうか。むしろ——広島における私自身の見聞に照らすならば——定型化された語りのうちにそれぞれの証言を回収することで、逆に出来事の記憶を封印してしまっただけではないか。被爆ないし戦争の記憶の「風化」が懸念され、「戦争体験」や「被爆体験」の「継承」ということがしばしば叫ばれるが、これらの問題は、出来事の直接の体験者が生物学的な生の終わりへと近づいていることにあるのではなく、むしろ出来事を生き抜いた人々の証言を今ここで聴く私たち自身の問題なのではないだろうか。そして、出来事を記憶する、あるいはその記憶を語り継いでいく私たちの言葉への問いは、これまで——とくに哲学的に——不十分なかたちでしか掘り下げられていないと考えられる。本研究を構想する背景にある基本的な問題意識として、おおよそこのようなことが念頭にある。

さらに、おびただしいパレスチナ人がイスラエル建国にともない故郷を追われたり、虐殺されたりした出来事「ナクバ」や済州島の「四・三事件」の証言などが示すように、これまで権力関係のなかで抑圧されてきた記憶が語られ始めている今、出来事を記憶する言葉の哲学的な探究は、喫緊の課題でもあろう。旧日本軍によって「従軍慰安婦」として働くことを強いられた人々の証言などが示すように、身体深く刻み込まれた癒えることのない傷から呼び覚まされてくる経験の記憶の証言は、実証的な歴史の論理や首尾一貫した物語には回収されえない。だが、そのことがいわゆる歴史修正（否定）主義者たちによって、出来事そのものを否認する材料に使われてしまっているのだ。また、国家事業としてのモニュメントの建設などが示すように、一つひとつ特異な経験の記憶を、国家が自己正当化する物語に回収し、その特異性を否定する動きがあることも否定できない。しかも、これらの動きの共犯関係は、今日強化されつつある。「国民」のアイデンティティに汚点や残す出来事を抹消したところに仮構される神話的な「ナショナル・ヒストリー」

が、「グローバリゼーション」と呼ばれる地球規模での社会構造の再編成によって孤立を深めた個人をつなぎ止めようとする国民国家と、孤立のなかでよりどころを求める個人との双方によって求められているかのようである。

しかしながら、記憶の抹殺の上に成り立つ「ナショナル・ヒストリー」が、20世紀の戦争のなかで、さらに今なお止むことのない内戦としての戦争のなかで、実際に他者を抹殺することへ向けて果たす役割を省みるならば、記憶そのものが語るかのように語り出される出来事の証言を聴き届け、その記憶を語り継ぐ言葉を探求することは、差し迫った課題だと言わなければならない。本研究は、このような現代世界の焦眉の問題に、哲学的思考をもって取り組もうとするものである。

2. 研究の目的

私はこれまで、ヴァルター・ベンヤミンの哲学的思考の研究に取り組み、言語を体系として実体化することなく、つねに他の言語の翻訳とともに一つひとつの言語が新たに形成されるのを言語自体のダイナミズムとして捉えるベンヤミンの言語哲学は、私たちがともすれば自明の所与として用いる「母語」をも相対化しながら、他者に応答する言葉が、越境的ないし複数言語的に生成する可能性を照射しうることを、人間の「移動」が常態化しつつある現代世界の状況も視野に入れながら明らかにしてきた。また、それと並行して、非随意的な記憶にもとづく抑圧されてきた記憶の救出のうちに歴史の可能性を見るベンヤミンの歴史哲学も、マルティン・ハイデガーやジャック・デリダの思想とも対照させながら、その現代における可能性を問うことへ向けて研究してきた。このような私の研究の、大きく二つに分けられる方向性は、記憶する言葉の可能性へ向けて接続されるものと考えられるし、またそれとともに研究そのものの意義も問われることになる。そして、もしこうした言語哲学と歴史哲学の研究をさらに押し進めながら、記憶すること、さらには記憶を語り継ぐことそれ自体の、歴史修正（否定）主義と「ナショナル・ヒストリー」の両方を越える可能性を明らかにできるならば、私たちが所与のアイデンティティを乗り越えてかつて起きた出来事を記憶し、その地点において他者と応え合う可能性も開かれてくるだろう。

もとより過去を記憶することそれ自体は、既成の国境や民族の壁を乗り越える普遍的な課題ないし責任としての一面を有するし、今日国民国家の自己正当化のための一つの記憶の絶対化に抗して、複数の記憶の布置のなかに個々の記憶の特異性を浮かび上がらせることも求められている。さらには、仮構

された「国民」の「共感」に抗して、また「ナショナル・ヒストリー」の連続性に介入するかたちで他者からの問いかけに応える記憶も、かつて出会い損ねた他者と出会いなおす回路を切り開くために求められていよう。本研究は、現代のこうした要請に応えながら、記憶する言葉を、他者たちのあいだで、出来事の証言者を含む他者に応えながら過去を想起し、記憶を語り継いでいく私たちの可能性へ向けて、哲学的に探究することを目的とする。そのためにこれまで研究してきたベンヤミンの言語論と記憶論の双方をさらに、それらをめぐる他の思想家の議論との布置において研究することには、豊かな可能性があるものと考えられる。

そこで本研究は、言語活動を他の言語への応答およびその翻訳として考察するベンヤミンの言語哲学と、非随意的な記憶を既成の歴史の連続性に抗する言葉のうちに救い出すことのうちに支配者が「正史」として語るのとは別の歴史の可能性を求める歴史哲学がいかに接続されるのかを探究することを通じて、そうした「正史」ないし「ナショナル・ヒストリー」に回収されることのない、他者に応え、他者たちのあいだで応え合うような記憶の言葉の可能性を、哲学的な理論として提示することを狙いとする。その可能性を現代の状況のなかでより具体的に明確化するには、記憶の表象についてのフィールド・ワーク的な作業とともに、現代芸術における記憶の表現を視野に入れた美学的な研究も必要になるであろう。これらによって、証言を聴き届けるなどしてかつて起きた出来事を記憶し、みずからの記憶を他者たちのあいだで語り継いでいく可能性が、今ここで他者とともに生きようとする私たち自身の可能性としてあることを示すとともに、私が現在研究活動の拠点としている広島をはじめとする記憶の場における記憶の表象のあり方について、何らかの提言ができればと考える。

ベンヤミンの歴史哲学のテーゼを、広島における記憶のあり方とそれにまつわる政治の歴史的研究に適用した例は見られるものの、その言語哲学も視野に入れつつ、記憶を語る言葉を思想的に探究した研究例はきわめて少ない。とくに、記憶の表象をめぐる現代の状況と要請に呼応するものとなると、その例はさらに少なくなる。そのような特異性をもちながらも、本研究は、他者と応え合う記憶の言葉を求める現代の多くの人々の問題意識に呼応するものである。

3. 研究の方法

2009年度は、過去の記憶が現在どのように表象され、語り継がれているのかを調査しながら、ベンヤミンの言語哲学と歴史哲学の研

究をこれまでより広い視野のなかでさらに深化させ、私たちが今どのように過去の痕跡の回帰や出来事の証言に応えて想起し、記憶を語り継いでいくことができるのか、という問題に取り組むための研究基盤を整える研究活動を進めることを予定している。そのためにまず、戦争による破壊、迫害や虐殺といった暴力の経験がいかに記憶されているのか、その記憶の仕方にどのような問題があるのかを、実際に記憶の場を訪れて調査し、現代における記憶論の展開を踏まえながら検討することにしたい。そのためには、現在の研究活動の拠点であると同時に世界的な戦争の記憶の場でもある広島における調査もさることながら、ヒロシマの記憶の表象をより広い文脈のなかに位置づけながら、他の場所における記憶の語られ方と対照させることも重要であろう。そこで、アウシュヴィツ＝ビルケナウ収容所跡をはじめ、かつてのナチス・ドイツの占領地域に散在する強制収容所や絶滅収容所の跡を訪ねたり、「ホロコースト」の犠牲者を哀悼する建造物などを実際に見たりすることによって、それらの場所における記憶の表象のあり方を調査し、哲学的に検討することにした。その際に、今やイスラエル国民のアイデンティティの基盤ともなった「ホロコースト」の記憶が世界化することによって、イスラエル建国とともにパレスチナ人が経験した「ナクバ」の記憶を語る余地が塞がれていることも無視できない。「ナクバ」を記憶し、語り継ごうとするパレスチナ人たちの努力を視野に入れながら、「ホロコースト」の記憶の表象を検討することは、「ナショナル・ヒストリー」を越えて他者と応えあう記憶の言葉の可能性を探究するうえで重要であろう。

当然ながら、このように現在の記憶の表象のあり方を検討するためには、自分自身の思想の深化が不可欠である。すでに述べたように、ベンヤミンの思想をこれまで以上に広い文脈のなかで研究しなければならない。とりわけ、現代における記憶論の展開や言語的実践の理論の広がりや視野に入れながら、幅広く文献を渉猟し、記憶を語る言葉の可能性に向けて研究を深化させるべきであろう。そのためにジャック・デリダ、エマニュエル・レヴィナス、マルティン・ハイデガー、フランク・ローゼンツヴァイクといった哲学者の思想と、ベンヤミンの思想を対照させる研究も重要になってくるはずである。そして、こうした研究の中間的な成果を発表することは、以後の研究の方向性に関する助言や文献収集に関する助言を得るうえで、有益であろうと思われる。

そこで2009年度は、ドイツおよびポーランドへの調査旅行を一回行ない、また日本国内での調査と資料収集を進めることで、他者

と応えあいながら出来事の記憶をその特異性において語る言葉の探究へ向けた基盤を整えることにしたい。そのような基礎的研究の中間的な成果を発表する機会も年度の終わり近くに設けたい。

次に、2010年度は、昨年度の研究成果を踏まえて、「ナショナル・ヒストリー」に回収されることなく、他者に応え、他者たちのあいだで応え合うなかで、かつて起きた出来事の記憶をその特異性において語り継いでいく私たちの言葉の可能性を、哲学的な理論として提示する可能性を具体的に探る研究を進めたい。そのためには、引き続き文献調査にもとづく思想研究をつうじて、ベンヤミンの言語哲学と歴史哲学をどのように接続させるのかを探究すると同時に、芸術における記憶の表現を幅広く調査し、検討することによって、暴力や破壊の経験がいかにかに想起されえ、またその記憶がいかにかに表現されるのか、その具体的な可能性を探ることも必要であろう。さらに、これまで封印されてきた国家による暴力の経験の記憶がどのように語られ始めているのか、またその記憶がどのように語り継がれようとしているのかを調査し、検討することも、今記憶を語る言葉の可能性を具体的に明確化していくうえでは重要であると考えられる。とくにそのために、韓国の済州島を訪れ、1948年の「四・三事件」の記憶がどのように語られ始めているのか、またその証言がどのように記録されているのかを、現地で調査することは示唆的であると考えられる。その成果と、「四・三事件」の記憶を表現する文学作品の分析などを接続させることができればと思う。

ベンヤミンの言語哲学と歴史哲学を接続させるうえでは、その思想の最新の研究動向を視野に入れることとともに、他の哲学者の思想との比較考察も重要である。幅広く文献を調査し、研究の深化を図りたい。また、広島における記憶の言葉の可能性を探究するためには、文学作品をはじめとするヒロシマの記憶の芸術的表現の蓄積を今日どのように読み直しうるのかを検討し、ヒロシマの記憶を真に世界化する回路を探ることも必要になるだろう。そのために原民喜の作品の読み直しに力を入れたい。最終的に、このような研究成果を、広島をはじめとする記憶の場における記憶の表象のあり方についての何らかの提言を含んだかたちで発表し、証言を聴き届けたり、過去の痕跡に向き合ったりしてかつて起きた出来事をその特異性において想起し、みずからの記憶を他者たちのあいだで語り継いでいく可能性が、今ここで他者たちとともに生きようとする私たち自身の可能性としてあることを、哲学的理論のかたちで提示できればと考えている。

2010年度は具体的には、韓国への調査旅行

を一回行ない、日本国内での調査と資料収集を進めることで、記憶する言葉の哲学的探究をより具体的に進め、その成果を問う場を年度の終わり近くに設けたい。

4. 研究成果

本研究は、言語活動を他の言語への応答およびその翻訳として考察するベンヤミンの言語哲学と、非随意的な記憶を既成の歴史の連続性に抗する言葉のうちに救い出すことのうちに支配者が「正史」として語るのとは別の歴史の可能性を求める歴史哲学がいかにかに接続されるのかを探究することを通じて、そうした「正史」ないし「ナショナル・ヒストリー」に回収されることのない、他者に応え、他者たちのあいだで応え合うような記憶の言葉の可能性を、哲学的な理論として提示することを目的とするものであるが、その準備作業として、2009年度は、ベンヤミンの思想の研究を他の思想家や文学者との布置において深化させようとする文献研究とともに、ナチス・ドイツの強制・絶滅収容所の跡を訪れるフィールド・ワークを行なった。前者の文献研究をつうじて、パウル・ツェランや原民喜といった文学者の詩的作品を、ベンヤミンの思想の理解を踏まえつつ新たに読み解くことで、記憶する言葉の可能性を探るという課題が浮上したので、その課題に取り組む方向性を示す論考を、2011年度中に共著書のかたちで公表する予定である。なお、本論考は、広島における記憶の現在を問い直しつつ、記憶する言葉の探究としてベンヤミンの思考を捉え直し、それを原民喜とパウル・ツェランの詩作の読み直しに生かす方向性を示すことで、記憶する言葉の可能性を示唆する構成である。その考察は、まずツェランの詩作において、ベンヤミンが語る「字句どおり」の翻訳のように、死者に応えるなかで、ドイツ語が内側から突き破られ、それとともに記憶の媒体としての詩的な言語が生成していることを指摘し、次に原民喜晩年の「鎮魂歌」が、言語を絶する出来事の記憶が、言葉を越えた姿のままに呼び覚まされる優れた意味での歌、あるいはベンヤミンが「過去の像」と呼ぶ、表象不可能なもの、みずから表象であることを越えていくようなイメージとして語られていることを指摘する。そして、本論考は最終的に、言葉が記憶する媒体でありうる可能性を、この「鎮魂歌」をはじめとする原の作品からさらにつぶさに読み取り、また原の作品を、ツェランをはじめとする、記憶の媒体としての詩の言葉を追い求めた詩人たちの作品との布置において、そして「原爆文学」という枠を突き破って読み解くという課題を提起している。それによって、記憶する言葉のありようが、いっそうはっきりと見通されてくるはずである。

なお、2009年度内に刊行された共著書に収められた論考「他者との来たるべき共生へ向けた哲学的試論——歓待と応答からの共生」も、未だ歴史になっていない記憶の分有を、歴史的な応答責任を踏まえた他者との共生に結びつける可能性を示す一節を含んでいる。ヴァイマルのブーヘンヴァルト強制収容所跡とアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制・絶滅収容所跡におけるフィールド・ワークは、記憶の表象のあり方や記憶の形象の可能性について考えさせられることの多いものであったが、それをつうじて得たものは、できるだけ早い時期に論考にまとめたい。

2010年度は、前年度の研究中に浮上した課題にもとづき、広島における記憶の現在を問い直しつつ、記憶する言葉の探究としてベンヤミンの思考を捉え直す研究に集中した。当初の計画では、韓国内の暴力の記憶のモニュメントやドキュメントを訪れ、昨年度来のフィールド・ワークをさらに深めるはずだったが、それに充てるべき夏期休暇の時期に体調を崩して、それが叶わなかったのは残念である。その分ベンヤミンの歴史哲学の研究を、言語哲学と接続させつつ再検討する作業に力を注ぐことができた。その成果は、日本ドイツ協会大会の共同討議「歴史を語るとは？」における報告「歴史を語る言葉を求めて——ベンヤミンの歴史哲学を手がかりに」にまとめられている。そこでは何よりもまず、従来の「歴史」の他者からの問いかけに、どのような歴史の言葉で応答しうるのか、「表象の限界」を今に突きつける出来事の傷跡を、歴史を語るどのような言葉で受け止めうるのだろうかという問題意識の下、時に対立的にも語られる、過去を想起する経験と、歴史を語ることとの関係を見つめ直し、両者の関係を、従来の歴史の他者からの問いかけに応えることへ向けて編み直し、想起にもとづいて歴史を語ることを、生きること自体のうちに今一度位置づけることを試みた。それによって初めて、生きること、いや死者を含めた他者たちとともに——神話としての歴史によって死を強いられることなく——生きること自体を構成する営為として、歴史を語ること自体を捉え直すことができるはずである。その際、想起の経験は、もはや閉じた共同体の伝承に根差したものではありえない。何よりもこの経験そのものが、時に「表象不可能」とも形容される出来事に開かれた仕方で捉え直されるべきだろうし、歴史を語る言葉自体も、そのような出来事の記憶をも今に蘇らせる可能性へ向けて追求されるべきだろう。それゆえ、歴史を語る言葉を、想起の経験と結びつけながらその可能性へ向けて問うことを、主にベンヤミンの歴史哲学を手がかりに試みた。実際彼の歴史哲学は、歴史を語ることを、想起の経験と結びつけて捉え直そう

としている。ただしここで想起とは、意志的に現在から過去へ遡るものではなく、むしろ意図せずして記憶に捕らえられるような「無意志的想起」である。「歴史の概念について」のための草稿において歴史は、「無意志的想起にもとづく一つの像」と定義されているのである。その際、さらに歴史を語る言葉が「像」と捉えられてもいる。ではそのことは、想起の経験にもとづいてどのように歴史を語る可能性を指し示しているのか。その可能性は、今ここで「表象の限界」に直面させる過去の出来事の一つひとつを、歴史を語る言葉において記憶することにも開かれているのだろうか。こうした問題を検討することによって、従来の歴史の他者であるような記憶にも応える想起をつうじて新たに歴史を語る見通しを切り開こうとしたのが、本報告である。そこでは、まずベンヤミンの哲学的思考における歴史哲学の位置を見定めた後、それがとくに『パサージュ論』の形成過程において、認識批判をつうじて想起の理論として語られる点に注目し、最後に「無意志的」であるような想起の媒体をなす「像」がどのような言葉でありうるかを、歴史哲学を言語哲学と接続しながら検討した。その結果明らかになったのは、ベンヤミンにとって歴史を語る言葉とは、一つひとつの出来事を名づけ、その記憶を今に呼び出すことが根底にある、想起の媒体として生成する過去の像である。そのような像としての言葉が生成する場面を、具体的に文学をはじめとする芸術的表現のうちに見て取ることをつうじて、これまでの歴史が忘却してきた記憶を継承しつつ、新たな仕方で、また他者たちとともに生きる余地を切り開く仕方で、歴史を語る可能性を模索しうるにちがいない。

最終的にそのような課題をも提示する本報告を縮約したものが、2011年度中にドイツ協会の機関誌に公表される予定である。2011年3月には、その内容を美学的に補完する論考を報告する機会も得た。そこでは、想起とともに歴史を語る言葉が、従来の歴史の他者に対する応答として——その意味で餌として——語り出される経験を美的なものとして捉え、歴史が今どこから語られうるかという問いを掘り下げたつもりである。その考察によれば、ベンヤミンが「翻訳」や「想起」の概念をもって考えているのは、けっして固定された二者が接する境界線上の出来事ではない。それらを論じる議論にしたがえば、他の言語による原作を翻訳したり、過ぎ去った出来事を想起したりする際、他者の言葉との遭遇とともに、これまで自分が依拠してきた規範が定めた境界が、根底から揺さぶられることを経験するのである。これを潜り抜け、異質な、あるいは時を隔てた他者の言葉に応える新たな言葉のうちに自己を見い

だすとき、その言葉はこうした他者の言葉の
研となる。その響きは、翻訳者が「母語」と
してきた言語の意味を、そして歴史を語る者
の現在を支配する法としての物語を溢れ出
て、これらを脱構築的に震動させるにちが
ない。そのような研の響きのうちに、ベンヤ
ミンは翻訳の意味からの自由として語った、
死者でもあるような他者への応答とともに、
また言語の生成とともに自己自身を創出す
る自由の表出を見ることができよう。本報告
は最終的に、そのような自由の余地を、言葉
を語る経験そのもののうちに見て取ってい
くことを、美学ないしは美的経験の理論の重
要な主題の一つとして提起している。この報
告も、公表する道をこれから探っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

柿木伸之「記憶する言葉を求めて——ベンヤ
ミンの歴史哲学を手がかりに」、日本ディ
ルタイ協会編『ディルタイ研究』第 21 号、2011
年秋刊。

[学会発表] (計 2 件)

柿木伸之「歴史を語る言葉を求めて——ベン
ヤミンの歴史哲学を手がかりに」、日本ディ
ルタイ協会 2010 年度大会共同討議「歴史を
語るとは?」、2010 年 12 月 4 日、家の光会館。
柿木伸之「研の美学試論——ベンヤミンの言
語哲学の美学的補遺のための素描として」、
山口大学人文学部公開研究会、2011 年 3 月
21 日、山口大学人文学部共同演習室。

[図書] (計 5 件)

柿木伸之、二村英夫、潮崎智美、大野亜由未、
野崎亜紀子、金谷信子、大庭千恵子著 (共著
書)『多文化・共生・グローバル化——普遍
化と多様化のはざま』ミネルヴァ書房、2010
年、総 243 頁。

クリストフ・メンケ著、柿木伸之、胡屋武志、
田中均、野内聡、安井正寛訳 (共訳書)『芸
術の至高性——アドルノとデリダによる美
的経験』御茶の水書房、2010 年、総 360 頁。
柿木伸之 (単著書)『共生を哲学する——他
者と共に生きるために』ひろしま女性学研
究所、2010 年、総 211 頁。

柿木伸之編著、東琢磨、藤本幸久、影山あさ
子、阿部小涼、比嘉真人、高雄きくえ、塩出
香織著 (編著書)『ヒロシマ、オキナワ、ア
メリカ——新たな戦争を越えるために』ひろ
しま女性学研究所、2010 年、総 112 頁。

東琢磨、川本隆史共編著、柿木伸之、小田智
敏、上村崇著 (共著書)『ヒロシマ——忘却
の記憶』月曜社、2011 年近刊、総頁数未定。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

研究発表を目的としたものは特設してい
ない。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柿木伸之 (KAKIGI NOBUYUKI)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号: 60347614

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: